

國學院大學學術情報リポジトリ

Three chapters concerning Tadanobu Fujiwara in
Makura no Soushi : the interpretation on those
occurrences and Norimitsu Tachibana

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000821

『枕草子』藤原斉信をめぐる三章段

―その顛末と橘則光―

木村 祐子

キーワード

枕草子 藤原斉信 橘則光 讚美 対照

はじめに

論題に謳った『枕草子』の「藤原斉信をめぐる三章段」とは、七八段「頭中将のすすろなるそら言を聞きて」・七九段「返る年の二月二十余日」・八十段「里にまかでたるに」を指す^①。斉信は、今回対象にする三章段の他に五章段^②、合計で作品中の八章段に名が見える。つまり、斉信は中関白家の人々を除き、作中で最も多く名のあがる男性官人となり、確実に最重要人物の一人に数えることができる。問題の三章段を通して清少納言と斉信との仲違いから関係修復、そして再びの絶縁までが語られるが、彼の話がこのようにまとまっている部分はない。本稿では、まず、三章段の冒頭がそれぞれ前段の内容を受け、かつ読みの方向性を示す指標^③となっていることを指摘し、年時順に配列された三章段が密接な連関のもとに配置されている特色、及び、そこから作中における斉信の人物造型を読み解

くことができる点に言及する。

齊信に関しては既に多くの論考があるが、七八・八〇段では主として橘則光とのかねあいからその人物造型を再検討する。当該の三章段は、全て何かを仕掛けてくる齊信とそれを冷静にかわす清少納言、という組み合わせで構成されている。齊信に付随して登場する橘則光は、清少納言の前夫とされ、齊信と同様に七八段に登場、八〇段では彼女との別離が語られる。七八段では源宣方と則光の二人が齊信の言動を間接的に伝える役を負い、本人が実際に現われることはない。七九段ではあからさまに姿を見せるものの、八〇段ではやはり「宰相の中將」なる呼称のみが記され、則光とのやり取りの中で動向が語られるに留まる。則光が登場するのはこの二章段のみだが、⁵道化的な脇役⁶の存在である反面、朴訥な愛すべき人物として、記事の主役たちを凌ぐ存在感で生き生きと描かれている。このような則光像が描かれる事情を、作品における齊信の造型との関連を通し、あわせて考察していきたい。

一 七八段 齊信と則光の登場

七八段では中宮は内裏におわし、齊信は「頭中將」、宣方は「源中將」、則光は「修理亮」と呼ばれている。まず、七八段を読み解く上で「いみじ」という語を取り上げたい。七八段では「いみじ」は十例を数える。清少納言が齊信の出した問いに返事をし、就寝したところまでを前半部とし、翌朝以降を後半部として分けると、「いみじ」が修飾する内容が両者で大きく二分されており、しかも後述するように、使い方の傾向が反転させられていることが分かる。このうち前半部では、五例のうち一例（「いみじう雨降りてつれづれなるに」を除き、残りの四例はすべて齊信の清少納言への嫌悪感とそれに伴う彼の言動を強調するために用いられている）。

頭中將のすずるなるそら言を聞きて、いみじう言ひおとし、「なにしに人と思ひほめけむ」など、殿上にていみじうなむのたまふと聞くにも、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのすから聞きなほしたまひてむ」と笑ひてあるに、黒戸の前などわたるにも、声などするをりは、袖をふたぎてつゆ見おこせず、いみじうにくみたまへば、ともかうも言はず、見も入れて過ぐすに、二月つもごり方、いみじう雨降りてつれづれなるに、御物忌に籠りて、「さすがにさうざうしくこそあれ。物や言ひやらまし」となむのたまふ、と人々語れど、「世にあらじ」などいらへてあるに、日一日下にゑ暮らしてまゐりたれば、夜のおとどに入らせたまひにけり。

……(中略)……「これ頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」と言ふ。いみじくにくみたまふに、いかなる文ならむと思へど……(以下略)

(七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」一三四～一四〇頁)

「すずろなるそら言」を聞いた斉信は、清少納言を「いみじう」けなしていた、という。その上、殿上の間で殿上人たちに彼女のことを「いみじう」、悪く言ったため、噂は知れ渡り、またそのことが清少納言の耳にも入ってくる。清少納言の声がすると、視線を合わせるのを「いみじう」、嫌がって、袖で顔を蔽うということまでする。清少納言の方は、それでもむきにならずにいた。そんなこんなの御物忌の日に、斉信は消息を送ってきた。清少納言は、自分を「いみじう」、嫌っておいでなのに一体何の手紙だろう、と思ったとある。この間の斉信の態度・言動を見ていく時、感情むき出しの「いみじ」と形容される彼の言動は、大仰で不自然な印象を受ける。斉信は単にこの感情のままに嫌悪感を露わにし、周囲に悪口をまき散らしていたのだろうか。

大体、殿上の間という公の場で悪口を言うことは、それが相手の耳に入ること承知の上でということになるだろう。事実、その話は清少納言の耳に届いていた。御物忌に籠った時の「さすがにさうさうしくこそあれ。物や言ひやらまし」との斉信の言葉も、「人々」によってその日のうちに清少納言に知らされ、彼女は「世にあらじ」と答えている。いわば筒抜け状態のだが、宮廷社会とはつまるところこのようなものである。だから、悪口は斉信の演技だったかも知れない。もし、そうだとしたら、斉信は何のためにこのような演技をしたのか。翌日、源宣方が人々の賞讃を清少納言に報告しに来るが、その中で斉信は、「もし言ひ出づる事もやと待てど、いささか何とも思ひたらず、つれなきもいとねたきを」と言っていた。この言葉が斉信の真意を解く手がかりとなるだろう。つまり、斉信は清少納言から何か言つてこないかと待ちながら、挑発を繰り返していたのだと思われる。しかし、清少納言の方は意にも解さず、知らん顔をしていた。それが本当に癪に障るといっているのである。

清少納言の側から接触がないことに痺れを切らした斉信は、『白氏文集』の詩句「蘭省花時錦帳下」を記し、「末はいかに、末はいかに」と質してきた。斉信としては清少納言が悪口の弁明のために早晩近づいて来るものと見ていたのだろうが、当てが外れ、今度は別の手に切り替えてきたものと思われる。それが「蘭省花時」云々という白詩を使った難題だった。この時期、斉信はあくまでも清少納言の方から接近してきたという形で、何とか彼女と気脈を通じておく必要に駆られていたらしい。つまり、斉信が主体的に近寄るわけにはいかなが、向こうから寄ってきたという体裁を装って、それなりの関係を築きたかったものと推測される。もちろん、その目的が何であるか

は、作品の明かすところではない。斉信の行動から見ると、そのように判断されるということである。

自他ともに認める才女である清少納言は、斉信のこの挑発に対しても面目を賭けて返答をすることになる。手紙の内容は「心ときめきしつるさまにもあらざりけり」とあるが、これは私的な恋文ではなかった、と解すべきではないだろう。清少納言が陰悪な関係にあると認識している斉信からの私信だったからであり、けんか腰ではなかった内容にひとまず安堵したという意味だと考えられる。そして、誰の手助けも受けずに清少納言は見事にこれを切り返し、殿上はその噂でもちきりとなった。

これ以降の章段後半部においても、「いみじ」が五例使われている点には当然留意していくべきで、その全てが清少納言への賞讃を強調する修辭である。翌朝、局に下りるとすぐに宣方がやって来て、斉信が清少納言の返事を「いみじき盗人を」と賞讃した、という。「盗人」に関して、『新編』の頭注が「人をのしる言葉であるが、ここは俊敏さをほめた言い方」と解説するように、それは斉信流の逆説的な贅辭であった。加えて、宣方は、皆で知恵を絞っても上の句が付けられなかったことなどを、「いみじうかたはらいたき」まで語って急ぎ帰って行った。昨夜清少納言がやってのけた返答は、「即座」の、しかも「用紙、用具、形式等あらゆる面に対する周到な心配りによる立場の逆転」だったことになる。⁽⁸⁾以上が後半部五回のうちの二度の「いみじ」である。

残り三つの「いみじ」は、則光の発言中に見られる。入れ替わりに則光が来る。則光が宣方より遅れたのは、清少納言が上局にいると思いついで、そちらを探し回っていたためである。則光は昨夜の評判を伝えたくて一晚中悶々としている程だった。

修理亮則光、「いみじきよろこび申しになむ、上にやとてまゐりたりつる」と言へば、「なんぞ。司召なども聞えぬを、何になりたまへるぞ」と問へば、「いな、まことにいみじうれしき事の夜べ侍りしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目ある事なりき」とて、はじめありける事ども、中将の語りたまひつる同じ事を言ひて、……………（中略）……………ことに、またこれが返しをやすべき』など言ひ合はせ、『わるしと言はれては、なかなかねたかるべし』とて、夜中までおはせし。これは、身のため人のためにも、いみじきよろこびにはべらずや。司召に少々の司得てはべらむは、何ともおほゆまじくなむ」

〔同〕一三八～一三九頁

前半部の斉信の気持ちや態度に使われた「いみじ」と後半部の主として則光にまつわって用いられるそれとでは、対照的だと言えるだろう。それは斉信と清少納言の力関係が逆転したことを象徴している。と同時に、それは「いみじ」き憎しみの言動を見せた人物と「いみじきよろこび」を表明した人物との対照と見てもよかつたろう。

章段の後半部で活躍しているのは宣方と則光であるが、人々が清少納言を賞讃した次第をすぐ本人にご注進に走ること自体、この二人の素直で人のよい性格が見取れる。両者の単純で善良な人物造型と斉信の複雑で屈折したそれとは、意識して対照的に描かれているものと思われる。加えて遅れて報告にやってきた則光には間の抜けた感さえあった。だが、則光の清少納言への言葉は彼の真摯な喜びを伝えており、道化的な反面、愛すべき人間性が感取されるべきところであろう。則光は宣方の伝達で十分なところを、重ねて報告役として登場しているため、滑稽な要素も強いのである。この章段で「源中将」(一三八頁・従四位下相当)と称される宣方は、「修理亮」(同頁・従五位下相当)とされる則光よりも身分が高く、「頭中将」である斉信とは、ほぼ互角の位置にあった。身分の劣る則光が、その分、道化的役を背負いがちだった事情は理解できる。宣方は斉信とは近い立場にあり、その意向を則光へ橋渡しする役目なのである。

先に見てきた通り、斉信は清少納言という一介の女房の悪口を言い触らすことさえ辞さない男として描かれていた。むろん、そんな行動を取った真意は分からない。だが、平然と構えていた清少納言に痺れを切らし、次に漢学の試問を課してきたのも、悪口を言いふらしたり、あからさまに彼女を無視したりする態度とは一貫性を欠く行動だった。そうした不自然な動きは、清少納言に近づいたための口実がほしかったのではないかと見る本稿の推測と矛盾しないだろう。「すずるなるそら言」に過剰な反応を示して、清少納言の出方を伺ったとする臆測も、その見方の一環にあった。ついに彼女は悪口の挑発に乗ってこず、処置に困って斉信は漢学の問題を突きつけてきた経緯だったに相違ない。そのような善後策として講じた漢学の試問に対しても、清少納言にうまくかわされ、斉信は立つ瀬もなく終った。右のような本稿の推測に従えば、斉信は万策尽きて失敗に終わったことになるが、その結末は「袖の几帳なども取り捨てて、思ひなほりたまふめりし」と締め括られる。かつて袖の几帳で顔を覆って清少納言を無視した態度も改められたのであるが、これは斉信が一連の騒動に決着をつけたという意味であろう。その後は清少納言の悪口を言い触らすような行為もなかったことは想像に難くない。この七八段はこうして斉信との和解が匂わされて終わり、その流れのまま、七九段へと繋がるわけである。

二 七九段 斉信の来訪

中宮は梅壺より職の御曹司に移られたものの、清少納言だけはそのまま梅壺に残っていた、という。斉信はその翌日、「かならず言ふ

べき事」があるので深夜に來訪したい、と連絡をよこした。実は、七八段と七九段の間には一年の空白があり、それは冒頭の「返る年の」によって分かる。だが、同時に、その「返る年の」という冒頭は、前段とのつながりを意識した物言いであつたらう。七九段がまず「返る年の二月二十余日」と日を特定して始まることは、この日における斉信との交流を話題とすることを読者に示す宣言だつたと見てよい。七八段ではまだ斉信との相互主体的な和解はなされていなかったが、その後は昵懇の間柄が続いていた。斉信の言葉を借りれば、「得意」な関係ということになるだろう。¹¹それが一年経つた今に至り、清少納言が逐一警戒心をもって対応する態度が目立つようになる。

清少納言は、斉信から來訪の旨の消息を受け取りながら、一度はそれを無視している。下女に指示も伝えず局を留守にして、翌朝もゆつくりと起床し、斉信から再度の伝言を受けて、ようやく面会を承知するという調子であつた。面会の場所に関しても、斉信の意に反し、人目のない深夜の局という申し入れから、白昼の人目の多い梅壺へと時間と場所を変えて指定した。これによって、斉信は清少納言が自分に対して何らかの含みを抱いていることを悟つたと思われる。

この会談の内容は語られずじまいだが、斉信の言葉としては、「職へなむまるる。ことづけやある。いつかまるる」という質問と、昨夜訪問した際の下女の応対への不平が記されていた。

「¹²ても夜べ、明かしも果てで、さりともかねてさ言ひしかば、待つらむとて、月のいみじう明かきに西の京といふ所より来るままに、局をたたきしほど、からうじて寝おびれ起きたりしけしき、いらへのはしたなき」など語りて、笑ひたまふ。「むげにこそ思ひうんじにしか。などさる者をば置きたる」とのたまふ。げにさぞありけむと、をかしようもいとほしようもあり。

（七九段「返る年の二月二十余日」一四三頁）

七九段は斉信との会談が話題の中心であるにもかかわらず、「会談前と会談後の話ばかりで、本題だけが抜け落ちている」といった形をとる。あたかも、「何を話したかは言えない。けど、会談前と会談後のことを書くから、中身はそこから想像して頂戴」とでも言っているかのようであろう。描かれざる会談の中身を、書かれた記述から類推してみたい。

下女の応対に斉信は不平を言ったが、その矛先はあくまでも下女に対してであつて、何も告げずに局を留守にした清少納言に対してではなかった。斉信は応対した下女の寝ぼけて起きてきた様子や「はしたなき」「いらへ」から、自分が來訪する旨を清少納言から知らされていなかった事情を察したはずである。にも関わらず清少納言に対しては何の抗議めいたことも言っていない。斉信は清少納言に表面

的なことしか言っていないものと思われる。

一方、清少納言がそれに何と答えたのかは記されていない。書かれているのは、「げにさぞありけむと、をかしうもいとほしうも」という齊信に対する他人行儀な同情だけで、そこには冷たい視線が感じられる。このことからすれば両者の心的距離は近いとは言えない。清少納言は齊信の美しい容姿に関しては、「まことに絵にかき、物語のめでたきことに言ひたる、これにこそはとぞ見えたる」と最大級の賛辞を送っているが、心の底には突き放した思いがあったということになるだろう。齊信の方もまた、それを肌で感じないわけではない。このような空気の中で、齊信は訪問の目的の核心は伝えられなかったのではないか。会談は表面的な話に終始したものと想像される。

それにしても、齊信は何のために清少納言を訪れたのだろうか。前夜の面会が彼の望むところではあったが、だからといって、色恋沙汰が目的とも思われない。それは「昨日の夜、鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがりければ、方違へになむ行く。まだ明けざらむに、帰りぬべし。かならず言ふべき事あり。いたうたたかせで待て」と記される彼の事務的な消息からも明らかであろう。このことに関しては、七八段に描かれたことが参考になる。齊信は、ある意味で「策士」であった。先に見た前段では、清少納言との関係を構築するために、分かりにくい動きをしていた。今回も同じく何らかの「交渉」を目的とした訪問であっても不思議はない。ここで言う「交渉」とは、相手に都合のよさそうな条件を提示して譲歩や協力を迫ることである。「かならず言ふべき事あり」という、齊信の消息の簡潔な文面からは、清少納言に対して何らかの喫緊の用件があった事情が窺える。しかし、前夜の清少納言からの肩透かしから、言葉で説得する自信を失ったのであろう、齊信は方針を変えたものと見られる。

記事に「おほかたの色ことなるころなれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬきは衣などばかりあまたあれど」とある（一四三頁）。清少納言はこの時に服喪中であつたわけである。本稿は、可能な限り、歴史事実と作品内容とを突き合わせない立場であるが、念のために言っておけば、この章段は中関白藤原道隆の薨去後一年の話であつた。齊信は、清少納言が喪服姿であることを承知の上で、色鮮やかな装束で現れる。

桜の綾の直衣の、いみじうはなばなと、裏のつやなど、えも言わはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織り乱りて、紅の色、打目などがやくばかりぞ見ゆる。白き薄色など下にあまた重なりたり。

（「同」一四二頁）

清少納言に己を見せつけ、圧倒しようという意図が透視されるだろう。齊信は無視されてそれを放置するような男ではない。その上で、

斉信はその装束によつて清少納言に、「そんな喪服にやつれていないで、こちらの世界に來ないか？そこを出れば、こんな華やかな世界が待っているのだ」とのメッセージを送っていたのではないか。つまり、その謂いは、「もはや落ち目の中閨白家を見限り、左の大殿（道長）側に來ないか？」という意味である。斉信は言葉で清少納言を説得することを諦め、代わりに華美な衣装によつてそれを伝えようとしたと解することもできるだろう。¹³⁾しかし、それに対し清少納言は、若やかならぬ自分の容姿の欠点を散々あげつらつた上で、「つゆの映えも見えぬ」喪服の自分を「物ぞこなひにくちをしけれ」として、物語の主人公のような斉信の対面相手としてふさわしくないと位置付けた。それは斉信のいる華やかな世界、即ち道長側には行く気がないということの意志表明とも受け取れよう。斉信は思うような反応を得られず、またもや彼の策は不首尾に終わつたと見られる。しかし、それが双方身体表現にとどまり、言葉によつて明確化されたものではなかつたので、斉信は次段において再度清少納言に接近を試みることになる。つまり、このことは次段の斉信の行動につながつていくと見られ、後述する。

もつとも、清少納言は斉信の装束に強く関心を寄せたらしく、中宮に対しても、「誰も見つれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見とほしつる」と中宮が仰せになる程、つぶさに観察した様子を報告している（一四五頁）。その報告の状況は、「御前に人々いとおほく、上人など候ひて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ定め言ひそしる」と記されている（一四四頁）。『新編』の頭注によれば、「上人」は「主上付きの女房。一説、殿上人」であるが、帝に近い人物であることは間違ひなからう。この人物が居合わせたことは一つの要点に違ひない。清少納言がこの日、斉信と面会していたことは、中宮付きの女房ばかりでなく、帝に近い存在の「上人」も直接耳にすることになった。清少納言は、帝に対しても斉信との対面を隠すつもりはなく、中宮にも堂々と報告した。斉信との会談が不発に終わったものと見られることは前述した通りだが、ここに「上人」がいたことが次なる八〇段への橋渡しになっている事情についても、注意しておく必要があるだろう。

三 八〇段 斉信との絶縁と則光との別離

七九段は、「返る年の二月二十余日」と冒頭で日を特定し、その日の斉信の訪問について語つた。次の八〇段では何が冒頭において示

されているのだろうか。

里にまかでたるに、殿上人などの来るをも、やすからず人々は言ひなすなり。いと有心に引き入りたるおぼえ、はたなければ、さ言はむもにくかるまじ。また昼も夜も来る人を、何しにかはなしとも、かかやきかへさむ。まことにむつまじうなどあらぬも、そこそは来めれ。あまりうるさくもあれば、このたびいづくとなべてには知らせず、左中将経房の君、済政の君などばかりぞ知りたまへる。

(八〇段「里にまかでたるに」一四五―一四六頁)

宮中を下がった清少納言は「殿上人」の訪問があつた場合にも、居留守を使つて恥をかかすことは潔しとしなかつた、という。にも拘らず、それが「あまりうるさ」いために、今回の滞在先を知らされていたのは源経房、源済政だけだつた。右の引用の文脈は、「殿上人などのさこそは来めれ」という主義主張と、「あまりうるさくもあれば」以下の行動との間に、一八〇度の論理の転換が窺える。もしも、前者の「殿上人などの」云々が一般論を述べたものだとすると、やや不自然な文脈であろう。これと関係がありそうなのが、引用以後の文章であつた。引用文には名が見えなかつたが、「左衛門尉則光」も滞在先を知つて一人だつたとおほしく、清少納言の許へやつて来ている(一四六頁)。その際に、則光は「宰相の中將」から彼女の居場所を教えろとしつこく聞かれた事情を耳に入れる。「宰相の中將」は斉信と思われる。彼も居場所を教えてもらえなかつた一人だつたわけである。実は、この点が先の不自然な文脈転換と関係しているものと見られる。

なぜ、斉信は居場所を知らされなかつたのか。この作品の二三七段「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」には、「左の大殿方の人知る筋にてあり」という噂によつて、清少納言が周囲に白眼視され、長期の里居に追込まれた記事が載せられていた。清少納言が「左の大殿(道長)」の周辺人物と親しい間柄にあることを仲間の女房たちに咎められた一件であるが、それは斉信との関係を指すものと見られている⁽¹⁾。配列上、一三七段はこれよりも遙か後方に置かれているが、右の引用文の「左中将経房の君」が「右中將」となっており、時間的には八〇段よりも以前の出来事である。その時の事情を八〇段が引きずっている可能性は低くない。先に眺めたように、八〇段の冒頭は、里下り一般の事を言つたもののように見えるため、一見斉信とは関係がないかのようにも思われる。だが、「昼も夜も来る人」と昼も夜もやつて来る人物に、「何しにかはなしとも、かかやきかへさむ」と居留守を使つて恥をかかせられないと言っているのであるから、広く一般に対する態度とは考えられないであろう。素直に見て、ここには七九段「返る年の二月二十余日」の斉信の来訪を想起

せずにはいられないのである。⁽¹⁵⁾

むろん、八〇段は、あくまでも表面上は「殿上人」の訪問について言っているのであって、斉信の訪問だと明記しているわけではない。また、斉信の訪問が語られた七九段は前段であり、直接的でもない。しかし、七九段の冒頭は、その前の七八段の内容を受け、それが読みの方向性を示す指標となっていた。これと同じ力学で、八〇段冒頭も前段と絡めて解すことは可能だろう。具体的には、同章段冒頭に「殿上人などの」云々とする一文は、前段「返る年の二月二十余日」の出来事を受けたものと見てよいのではないか。清少納言は、斉信に居場所を教えるのはやぶさかでないが、それでは「あまりうるさくもあ」るので、今回は教える対象にできなかった。そう考えれば、文脈の不自然も解消されるように思われるのである。この三章段は密接な連関において捉えることによって、円滑な解釈が可能になるものと思われる。

話は戻るが、前段の七九段において、清少納言は斉信との会談について中宮に報告し、その場に「上人」がいたことは既に述べた。臆測であるが、この「上人」によって後にこれが噂として流され、「やすからず人々は言ひなすなり」という状況につながった可能性はないか。八〇段冒頭では、「まことにむつまじうなどあらぬも、さこそは来めれ」とあり、真に親密でないような人も、頻繁にやって来るような書きぶりであった。普通に考えれば、少し考えにくい状況であるように感じられる。だが、これが斉信のことだとしたら、どうか。斉信とは親しい間柄ながら、心の中では「むつまじ」う思えないのであろう。ここには斉信に対する心的な遠近感が見え隠れしているように思われるのである。

先に触れたように、引用文の直後には則光が登場していた。則光は斉信の家司と見なされていた人物だが、主人筋の斉信の再三の追求にも関わらず、清少納言の滞在先を白状しようとはしなかった。話の中で、斉信に嘘をつき通して笑いをこらえるのが大変で、則光が台盤の上の「布（海藻）」を食い散らかしてごまかした事件に触れていた（二四七頁）。数日後、則光は再び斉信に責められて対処に窮し、清少納言の許へお伺いを立ててくる。清少納言は、その時の逸話にちなんで海藻を「一寸ばかり包」んで贈り、居場所を言うなどの寓意を籠めたが、則光には通じず、不器用にも真意を尋ねてきた。清少納言は、「かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなどやめを食はせけむ」と和歌で教える。言うなという目くばせですよ、といった程度の意味である。機転が利かず、おおらかで気取らない則光の人物造型は印象的であると言えよう。

さらに当章段の後文によれば、それ以降も二人はお互いに持ちつ持たれつとの関係にあったが、「何ともなくて、すこし仲あしうな」った、という。理由は明らかにされていない。則光は「便なきことなど侍りともしよそにてはさぞとは見たまへ」と和解を望む手紙を送ってきた。昔から「おのれをおぼさむ人は、歌をなむよみて得さすまじき。すべてあたかたきとなむ思ふ」と和歌贈答を拒否してきた則光だったが、清少納言は「くづれよるいもせの山の中なればさらに吉野の川とだに見じ」とあえて歌を送りつける。則光の返歌はなかった。則光は歌が苦手で全く詠めないというわけではなく、『金葉集』に一首入集する勅撰集歌人だった^⑩。その彼を全くの歌嫌いの無風流な男に仕立てたのは、『枕草子』の作品固有の認識だったのであろう。その点については次章で触れる。いずれにせよ、則光は斉信に最後まで口を割らず清少納言に誠実を貫いたが、やがて叙爵して遠江介となり、二人の仲は絶えた、と当章段は結ばれている。

四 斉信と則光

以上、見てきたように、斉信の姿は則光の動きを通して、間接的に描かれているという感が強い。七八段では、清少納言への報告者が宣方、則光という登場順となっており、それによって斉信との関係性の濃淡が鮮明化していった。八〇段冒頭は、七九段を受けつつ、斉信とのその後の関係を語る内容を予告する書きぶりであったが、実際の斉信は人の会話中にその名が見えるのみであり、清少納言との絶縁も直接語られることはなかった^⑪。一方、七八段でも八〇段でも、則光は単に斉信の言葉やその意向を伝える存在なのに、その人間性は生き生きと描かれている。こうした特色と三章段の主役たるべき斉信を描くこととは、どう関わるのか。

前述したように、『枕草子』に描かれる斉信と則光はその人間性において対照的な面がある。斉信は作品きつての雅な男性であった。このことは他の斉信登場章段からも明らかだ^⑫。七九段でも、容姿が物語の主人公のようだと絶賛され、また中官方に参上した際、やはり才女として名高い宰相の君に白氏文集の詩句を吟誦して、優雅に応じたことが人々に賞讃されていた。ただここで注意したいのは、賞讃の対象があくまでも容姿や才覚であり、彼の人間性についてではない点だろう。

一方、則光は武勇の誉れの高い剛毅な男性だったらしい（『今昔物語集』卷二十三第十五、及び『権記』長徳四年十一月八日条など）。しかし、『枕草子』では明らかに道徳的な人間に描かれている。また、実際の則光は歌を詠まないわけではないのに、歌嫌いとされている。

るのは前述の通りであった。斉信は手の込んだ動きをする男で、清少納言に近づく必要上、彼女の悪口さえ公言して憚らない人物として描かれていたが、則光は単に人のよい純朴な男性であった。清少納言に対する周囲の称賛をわが喜びとし、報告にも嘘や偽りを交えずに伝えている。嘘偽りが無いというのは、七八段に「中将の語りたまひつる同じ事を言ひて」とあり、則光の報告は宣方のそれと同じだったからである。則光は、清少納言への人々の賞讃を尊び、これに比べたら、少々の出世など何でもないとまで言い切る（七八段）。また、清少納言との約束を守り通し、出世の手蔓であるはずの主人斉信の再三の要求にも応じようとはしなかった（八〇段）。

七八段に「この『いもうとせうと』といふ事は、上までみな知るしめし、殿上にも、司の名をば言はで、せうととぞつけられたる」とあるように、清少納言と則光は元夫婦の関係であるが、「いもうと」「せうと」と呼びならわされていたのは有名な話であろう。この間柄を主従関係より大事にする則光は、断じて出世第一主義者ではない。

斉信は、作中で「過ぎにたる事なれども、心得て言ふは誰もをかしき中に、女などこそさやうの物忘れはせね、男はさしもあらず。よみたる歌などをだにまおほえなるものを、まことにをかし」と評されている（一五五段「故殿の御服のころ」二八五頁）。些細なことも忘れずに、注意深い造型であったことが分かる。則光は、「布（海藻）」の一件でも明らかだったように、小さなことはすぐに忘れてしまふおおらかな人柄であった。斉信は機転が利く。それは一二九段「故殿の御ために、月ごとの十日」の折に合った朗詠などにも端的に伺える鮮明な造型であった。対して、則光は逆である。斉信は身分が高く漢詩文の朗詠に優れ、機知に富み、雅で複雑、繊細、陰險なのに対し、則光は身分が低く、道化的、無骨、歌も詠まず無風流、単純で義に篤くおおらかで闊達な性格として描かれている。

このように『枕草子』の斉信と則光はその人間性が全くと言ってよいほど対照的なのである。『枕草子』は、斉信を主役とするはずの当該の三章段のうちの二章段に、それを上回る比重で則光を描いた。斉信と対照的な則光の姿を描写することによって、その奥に則光とはまさに対極にある斉信を透かし見せようとしたのではなからうか。本人と正反対の則光を描くことで、対極にある斉信を間接的に想起させる。「まことにをかし」「いみじうめでたし」と賞讃される斉信の輪郭は、則光の対照に置かれることによって鮮明になるのである。それは身分の低い則光と高貴な身分の斉信とを対照することによって、両者を相対化しようとする試みだったかも知れない。もつとも、それはあくまでも読者の側の問題であるだろう。

なお、前章において、斉信については「絶縁」とし、則光とは「別離」としたのは、両者と清少納言との人間関係の内実が全く異なる

ことから、別れの意味も同様でないと思われたからである。⁽¹⁹⁾あるいは、斉信との絶縁の「換喩」⁽²⁰⁾として、則光との別れが脚色された可能性も否定できないようにも感じられる。

結び

七八・七九・八〇段は、斉信にまつわる事柄を年時順に三段まとめて読むことで、その連関性から斉信の人物造型が鮮明に浮かび上がる構造を持っていた。七八段では斉信の不自然な動きとそれに冷静に対処する清少納言の姿、七九段では一度は拒否されたものの、再び色鮮やかで豪華な装束で現れるが、その衣装には喪服の清少納言を圧倒し、なおかつ離反を勧める意図も籠められていた。八〇段では七九段の斉信との交流のために里居を余儀なくされた清少納言をめぐる則光と斉信が、それぞれ対比的に描かれていた。

『枕草子』が世に出た頃、現実社会の斉信は政界の重職にあった。清少納言が斉信をいかに描くかは人々の注目するところであったかも知れない。また、清少納言にしてみれば、斉信をいかに書けばどのような影響があるかということも、慎重に計っていたに違いない。結局、選択されたのが、斉信と全く人となりが対照的な則光を描くことで、それと対極に位置する斉信の姿を透かし見せるという方法だったように思われる。則光は道化的だが雅な斉信を対照化する存在であり、一方、斉信は讚美の対象でありつつも則光の対照として相対化される存在だったのである。『枕草子』の則光が烏滸的で歌嫌いという造型なもの、斉信との対照性を演出するための改変だとさえ思われる。そして、そのために登場した則光が、主役を凌ぐ生き生きとした独自の魅力を放つことになるのも、書き手にとって想定外のことではなかったと想像される。

以上、『枕草子』の当該三章段に描かれた斉信と彼の策を常にかわす清少納言の様子について検討してきた。それ以外の斉信の関わる五章段では、斉信は単に雅な貴公子という印象が強いが、それは清少納言のバランス感覚に拠るところが大きいと考えられる。

注

(1) 当論の『枕草子』の本文・章段数・頁数は、『新編 日本古典文学全集（小学館 平成九年）』による。

- (2) 八九段「無名といふ琵琶」・一二三段「はしたなきもの」・一二九段「故殿の御ために、月ごとの十日」・一五五段「故殿の御服のころ」・一九〇段「心にくきもの」
- (3) 小森潔氏は「章段の冒頭が読みのベクトルを指示するコードとなる」とされる。「枕草子のコミュニケーション——頭中将のすすろなる嘘言を聞きて」の段をめぐって」（『物語 その転生と再生』新物語研究2 有精堂 平成六年）
- (4) 赤間恵都子氏は「斉信の人間像は作品の中で揺れている」（『長徳二年の章段について』『枕草子日記的章段の研究』三省堂 平成二二年）とし、津島知明氏は斉信を「長徳の変」を背負う者」として「〈斉信との交友の物語〉は際どくも美しく屹立している」（『頭中将 斉信、〈記憶〉を託された男』『枕草子論究』翰林書房 平成二六年）とし、三田村雅子氏は七九段について両者は「趣味恋愛」の関係にあったとされつつ、「斉信の外見のみを描く文体には斉信の持つ美貌への讚美の裏に、政治的計算への嫌悪が巧みに隠蔽されて表現されている」（『枕草子の沈黙——あはれ」と「をかし」——『枕草子表現の論理』有精堂 平成七年）とし、高橋由記氏は八〇段で斉信を強く拒絶することから「八〇段にこそ、清少納言の真の斉信観があらわれている」（『枕草子』八〇段に関する疑問』『大妻国文』第40号 平成二二年三月）とする。なお、斉信に関する研究史を高橋氏がまとめている。此処にはそれ以後の論考について掲げた。
- (5) 一二七段「二月、宮の司に」に「則光、なりやすなど笑ひてやみにし事を」とあるが、呼称のみなのでこれについては検討から除外する。
- (6) 高橋由記氏は、鳥譚者則光には女房社会の価値観や『枕草子』の執筆意識が深く関与しているとする。なお則光に関する研究史については、この論にまとめられているので参照していただきたい。「橘則光について——『枕草子』を中心に——」（『明星大学研究紀要——日本文化学部——言語文化学科』一五 平成一九年三月）
- (7) 七九段にも「心ときめき」の用例がある。「局は引きもやあけたまはむと、心ときめき、わづらはしければ」清少納言は斉信を警戒しつつ局での対面を避けているのだから、この場合もよい予想で胸がドキドキしているのではない。
- (8) 岡田潔氏「頭中将のすすろなるそら言をききて」（『女子聖学院短期大学紀要』平成二二年三月）。なお、萩谷朴氏『枕草子解環』二七十七段の論説に詳しい。
- (9) 藤本宗利氏は、則光の挿話は、純朴な彼のの人となりを描くため、「彼の武勇の誉れに、厚みを加えるもの」だとする。「里にまかだたるに」段の本質——橘則光との交流をめぐって」（『枕草子研究』風間書房 平成十四年）

(10) 注3に同じ。

(11) 斉信は「かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし」(二二九段「故殿の御ために、月ごとの十日」と言っている。「新編」は「得意」に「古いなじみ・ひいき」と頭注している。

(12) 注4の津島氏の論文。

(13) この衣装描写について、田畑千恵子氏は伊周への讚美が斉信へと移行し、宮廷讚美を指向しつつも、清少納言自身の「物ぞこなひ」な姿によって崩壊するとされ、津島氏は「居心地の悪さをもたらす斉信のめでたさ」と「私」は「正反対のベクトルを有する」とされる。田畑千恵子「枕草子」かへる年の二月二十余日」の段の位相」(『国文学研究』80 昭和五八年六月) 及び注4の津島氏の論文。

(14) 注4の三田村論文。

(15) 七九段で語られた斉信の訪問は、深夜、翌昼の二度となり、昼に来訪したその姿は「まことに絵にかき、物語のめでたき事に言ひたる、これにこそは」というものであった。この目立つ服装では、居留守を使ったなら、まさに恥をかかせることになるだろう。このときの美麗な斉信の姿は人目を引き、「この事どもよりは、昼斉信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまどはしとこそおぼえつれ」と仰せらるるに、「さて、まことに常よりもあらまほしうこそ」など言ふ。……(中略)……と口ずさみつること」など、かしがましきまで言ひしこそ、をかしかりしか」と、後々も噂になっていた見られる。

(16) 『金葉集』(二度本) 卷六・別部(三奏本では三六〇番歌)

陸奥国へまかりけるとときあふさかのせきよりみやこへつかはしける／橋則光朝臣

われひとりいそぐとおもひしあづまぢにかきねのむめはさきだちにけり

則光が『枕草子』に描かれる程、歌嫌いではなかったことは、藤本一恵氏「橋則光ゆかりの人たち」(『女子大國文』五八 昭和四五年七月)、後藤祥子氏「和歌生活―女歌と物語」(『岩波講座 日本文学史』3巻 岩波書店 平成八年)、高橋由記氏(注6の論)等が論じている。

(17) 津島知明氏は「△則光との絶縁▽は△斉信との訣別▽の換喩であり、結果として決別を描くために則光は登場してきたのだ」とする。注4の津島氏の論に同じ。

(18) 注2に挙げた各章段。

(19) 藤本宗利氏(注9)は清少納言の歌に焦点を当て「表層的な拒絶の態度とは裏腹に、則光との交流を、せめて言語の上だけでも確立しよう」とする清少納言像を読み取る。これに対し高橋由記氏(注6)は疑問を呈している。

（20）注4の津島知明氏の論。